

教員氏名：瀧澤 敦子（教育学部教育学科・児童教育専攻／准教授）

1. 教育の責任（何をやっているか）

児童教育専攻に所属し、主として1年次の英語Ⅰ・Ⅱおよび教員養成に関する授業を担当している。学生が将来、小学校・中学校・高等学校の教育現場で活躍できるよう、英語運用能力の向上だけでなく、授業実践力や学習指導力の育成を重視している。

担当授業では、理論と実践を結び付けた学びを提供している。また、授業以外にも卒業論文指導、英語サークル等に携わっている。

2. 教育の理念（なぜやっているか）

高校英語教員としての経験 私は高校英語教員として複数の学校で勤務してきた。その中で、生徒の進学実績向上を重視する学校では、文法や読解を中心とした授業を展開し、大学入試に必要な知識や技能の定着に力を注いできた。一方で、異なる教育方針をもつ学校では、英語を実際に使用することを重視し、ペアワークやプレゼンテーションなどのアウトプット活動を積極的に取り入れた授業を行ってきた。

英語教育観の形成 このような経験を通して、英語教育には知識の習得とコミュニケーション能力の育成の両方が必要であることを実感した。特に、生徒が自分の考えを英語で表現し、他者とやり取りする経験は、学習意欲や自己効力感の向上につながることを数多く目にしてきた。その結果、現在は「知識を教えるための英語教育」だけでなく、「英語を使って他者と関わり、自ら学び続ける力を育てる英語教育」を目指している。

教員養成に対する考え方 私は、文法指導とコミュニケーション活動を対立的に捉えるのではなく、学習者の実態や学習目標に応じて適切な指導方法を選択できる教師を育成したいと考えている。大学における教員養成では、学生がさまざまな授業実践や教育理論に触れながら、自らの教育観を形成し、状況に応じて最適な指導方法を判断できる専門職として成長することを期待している。

3. 教育の方法（どのようにやっているか）

英語を使用する機会の重視 私は、英語は知識として理解するだけでなく、実際に使用することによって身に付くものであると考えている。そのため、授業ではペアワークや

グループ活動を積極的に取り入れ、学生同士が英語でやり取りする機会を設けている。また、ショートスピーチやプレゼンテーション活動を通して、一人ひとりが自分の考えを英語で表現する経験を重視している。

活動にあたっては、内容面だけでなく、聞き手に伝わる発音やイントネーションについても指導している。学生が自ら改善点を確認できるよう、インターネット上の音声教材や発音支援ツールを活用し、モデル音声を参考にしながら練習できる環境を整えている。

これらの活動を通して、英語を「学ぶ対象」としてだけでなく、「伝えるための手段」として活用する経験を積ませることで、英語使用への心理的負担を軽減し、コミュニケーション能力や表現力の向上を図っている。

学習意欲を高める工夫 英語学習に対して苦手意識や不安を抱えている学生は少ない。そのため、私は学生が失敗を恐れずに授業へ参加できる環境づくりを重視している。

授業では、ペアワークやグループ活動を用いたアイスブレイクを取り入れるなど、学生同士が自然にコミュニケーションを取れる雰囲気づくりを心掛けている。また、活動内容についても、学生の興味や身近な話題を取り上げることで、英語を使うことへの心理的負担を軽減し、主体的な参加を促している。

さらに、学生が小さな成功体験を積み重ねられるよう、難易度を段階的に設定した課題や活動を取り入れている。英語を正確に話すことだけでなく、自分の考えを伝えようとする姿勢や挑戦する過程も積極的に評価することで、学習への自信と意欲の向上を図っている。

私は、学習意欲は知識の習得の前提となる重要な要素であると考えている。そのため、学生が「英語が分かった」「伝わった」という達成感を得られる授業づくりを通して、継続的な学びにつなげたいと考えている。

4. 教育の成果（行った結果どうだったか）

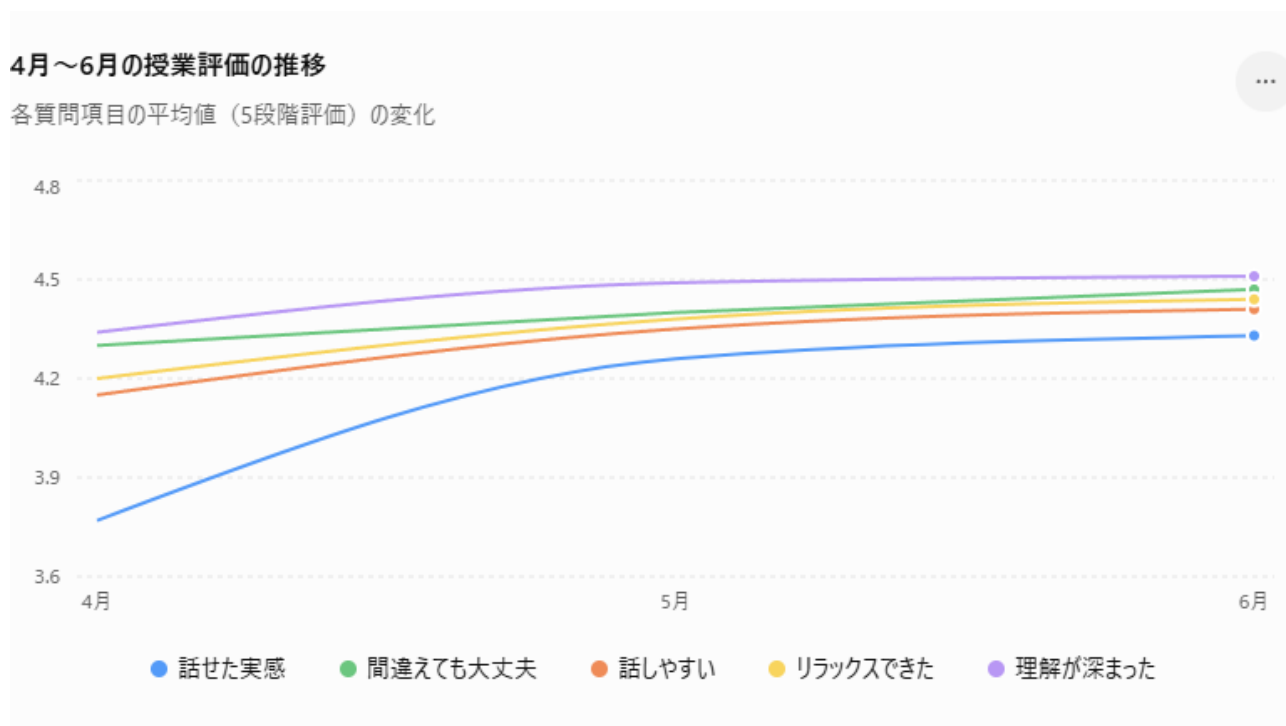
英語 I（児童教育専攻 1 年生 55 名）の授業において、授業改善および学習状況の把握を目的として、毎時間終了後に授業評価アンケートを実施している。アンケートでは、「英語を話せた実感」「間違えても大丈夫だと感じた」「英語を話しやすと感じた」「授業の雰囲気はリラックスできた」「ペア活動で理解が深まった」の 5 項目について、5 段階尺度（1：全くそう思わない～5：とてもそう思う）による自己評価を求めた。下の表およびグラフは、

4月から6月までの回答結果を月ごとに集計し、その平均値を示したものである。

表 1

項目	4 月	5 月	6 月
自己評価（話せた実感）	3.77	4.26	4.33
間違えても大丈夫だと感じた	4.30	4.40	4.47
英語を話しやすいと感じた	4.15	4.35	4.41
授業の雰囲気はリラックスできた	4.20	4.38	4.44
ペア活動で理解が深まった	4.34	4.49	4.51

グラフ 1



4月から6月にかけて生徒の授業評価を分析した結果、「英語を話せた実感」および「英語を話しやすいと感じる程度」において有意な向上が認められた（ $p < .05$ ）。特に自己評価（話せた実感）については4月から5月にかけて大きな上昇がみられ、その後も高い水準を維持していた。一方で、「間違えても大丈夫だと感じる」「授業の雰囲気がリラックスできる」などの項目は平均値の上昇が見られたものの、有意差は認められなかった。これらの結果から、本授業実践は生徒の英語使用への自信や発話への積極性を高めることに寄与した可能性が示唆された。

ただし、本調査は学期途中の 6 月時点での分析であり、授業実践は現在も継続中である。
そのため、本結果は中間的な成果として解釈する必要がある。

5. 教育における今後の目標（これからどうするのか）

短期的な目標

学生が主体的に学ぶ授業の実現に向けて、ペアワークやグループ活動、ショートスピーチやプレゼンテーション活動のさらなる改善を図りたい。特に、英語に苦手意識をもつ学生も安心して参加できる活動を工夫し、一人ひとりが成功体験を積み重ねながら学習への自信を高められる授業づくりを目指したい。

中期的な目標

英語教育および教員養成に関する研究と実践を往還しながら、より効果的な指導方法の開発に取り組みたい。高校教員としての経験と大学教員としての実践を基盤に、学生の英語運用能力や授業実践力を高めるための教育方法について研究を深め、その成果を論文として発信していきたい。

長期的な目標

理論と実践を結び付けながら、教育現場で活躍できる英語教員の育成に貢献したい。学生が卒業後も学び続ける姿勢をもち、変化する教育環境の中で主体的に成長できる教師となることを支援できるよう、自身も教育実践と研究を継続的に発展させていきたい。

【添付資料】 ※全部又は一部の現物を省略しています。

- 1
- 2
- 3

(2026 年 6 月 22 日現在)